

共に伸び、共に輝け、感謝・感動

しなやか

えだわん 10月



えだわんだより



横浜市立荏田東第一小学校

◆〒224-0006 横浜市都筑区荏田東三丁目5番1号

◆Tel…045-941-7630 Fax…045-942-9464

◆<http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/edahigashi1/>

読書、苦手ですか？

学校長 熊谷 潤平

校舎内を巡回していたら、国語の学習で詩を読んでいるのであろう4年生の子から、おもしろい質問を貰いました。

「校長先生、『かっこいい詩』って、学校にある？」

私は、「そりゃあ、あるよ。探してごらん。」というと、その子は、友達や担任と、学校図書館へ元気よく「かっこいい詩」を探しに行きました。

詩といえば、先日、とある研修で一冊の詩集を紹介していただきました。紹介してくださった方は、2年の国語教材「わたしはおねえさん」の作者、石井睦美さん。その中にあった、たった一行の詩に、心が震えました。自分でもよく分からない感情が、目からあふれ出てきました。

くも

空が青いから白をえらんだのです

この詩を書き、自ら読んだのは、奈良少年刑務所のA少年。A少年は語ります。

「今年でおかあさんの七回忌です。おかあさんは病院で『つらいことがあったら、空を見て。そこにわたしがいるから。』とぼくにいつてくれました。それが最期の言葉でした。おとうさんは、体の弱いおかあさんをいつも殴っていた。ぼく、小さかったから、何もできなくて…」Aくんがそう言うと、教室の仲間たちが手を挙げ、次々に語り出しました。

「この詩を書いたことが、Aくんの親孝行やと思いました」

「Aくんのおかあさんは、まっ白でふわふわなんやと思いました」

「ぼくは、おかあさんを知りません。でも、この詩を読んで、空を見たら、ぼくもおかあさんに会えるような気がしました」

と言った子は、そのままおいおいと泣きだしました。

自分の詩が、みんなに届き、心を揺さぶったことを感じたAくん。

いつにないはればれとした表情をしていました。

寮 美千子・編「空が青いから白をえらんだのです 奈良少年刑務所詩集」新潮文庫より

私が一冊の詩集に心を揺さぶられたように、「えだわん」の子たちも、何かすてきな一冊に会えたらいいな、と願います。

本年度行われた全国学力・学習状況調査（6年生対象）の中で、「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、一日当たりどれくらいの時間、読書を読みますか。（教科書や参考書、漫画や雑誌は除く）」という問いに対し、本校は36.3%の児童が「全くしない」と回答しています。実に三分の一強。加えて、これは全国平均より10%高い値です。全国平均・市平均より高い低いで一喜一憂・大騒ぎするつもりはありませんが、本校の大きな傾向として「読書離れ」は見て取れます。面倒、嫌い、苦手…理由はいろいろあるのでしょう。

読書をせずとも他者には迷惑をかけないし、あまり本を読まなくても「見える学力」が高い子もいます。それでも、読書は言葉を育てます。そして言葉は、心を育てるのです。こうして育った心というのは、最近、国立教育政策研究所などが言うところの「非認知能力：社会情緒的能力」に通ずるものがありましよう。

秋の訪れを知らせてくれる金木犀の香りを、今年初めて感じたのは9月27日。これからのいよいよ秋が深まります。読書の秋。非認知能力を伸ばす秋。保護者の皆様も、地域の皆様も、この秋、読書にふける姿を子どもたちに見せていただけたらうれしいです。